

日本語版感情欲求尺度開発に関する研究*

神 山 貴 弥**
藤 原 武 弘***

一般的には、人はネガティブな状態よりもポジティブな状態を好む。しかしその一方で、そこで喚起される感情がポジティブかネガティブかにかかわらず、感情を伴う状況や活動に好んで関わろうとする人もいれば、そうした状況や活動をできるだけ避けようとする人もいる。Maio & Esses (2001) はこうした個人差を感情欲求 (the Need for Affect) と名づけ、「感情を誘発するような状況や活動に接近または回避することを求める一般的な動機」として定義した。ちなみにここで扱われているのは、情動、気分、好みや評価を含む広義の感情である。従来、情動知能 (Mayer & Salovey, 1993) やアレキシサイミア (Taylor, Ryan, & Bagby, 1985) など感情の能力に関する個人差や、情動強度 (Bachorowski & Braaten, 1994)、情動抑制 (Byrne, 1961)、情動表出 (King, 1998) など感情スタイルに関する個人差は数多く取り上げられてきた。しかし、感情に対する個人差を動機面からとらえたものはほとんどなく、そうした中で概念化され尺度化まで行われているのがこの感情欲求である。

Maio & Esses (2001) は感情欲求の尺度化を試み、最終的に 26 項目から成る感情欲求尺度 (the Need for Affect Questionnaire: 以下 NAQ と記す) を作成した。NAQ は感情を伴う状況や活動への接近動機を測定する感情接近欲求 (13 項目) と、感情を伴う状況や活動への回避動機を測定する感情回避欲求 (13 項目) の 2 つの下位尺度から成る。確認的因子分析の結果、NAQ を 1 因子として扱うよりも上記の下位尺度に基づく 2 因子とし

て扱う方が適切であることが示されたが、2 つの潜在因子の間には有意な負の相関関係があることから、NAQ からは全体得点、感情接近欲求得点、感情回避欲求得点が算出される。

Maio & Esses (2001) の研究では NAQ の基準関連妥当性を検討するために、情動に関する個人差 (情動強度 (Larsen & Diener, 1987) やアレキシサイミア (Taylor, et al., 1985) など)、認知スタイルに関する個人差 (認知欲求 (Cacioppo Petty, & Kao, 1984) や認知的構造欲求 (Thompson, Naccarato, & Parker, 1989) など)、行動の活性／抑制に関する個人差 (BIS/BAS 尺度: Carver & White, 1994)、性格特性 (Big Five 尺度: Costa & McCrae, 1991) との関係性が検討された。その結果、全体得点については例えば、情動強度との関係から、感情欲求が高い人は強い感情を経験することに寛容であることや、アレキシサイミアとの関係から、感情欲求が高い人は感情に対する認識が高く、かつ感情を理解したり利用することがうまくできていることが示された。また BIS/BAS 尺度との関係からは、感情欲求が高い人は行動活性システムの働きが高く、行動抑制システムの働きが低いことが示された。認知欲求との関係性については事前に予測されていなかったが、感情欲求が高い人は認知的に努力を必要とする活動も求める傾向が強いことが明らかになった。このように他の個人差との間に概ね予測されたような関係性が得られたことから、NAQ の基準関連妥当性が示された。また Maio & Esses (2001) は、感情欲求が高い人は低い人よりも極端な態度を取り

*キーワード: 感情欲求、個人差、尺度開発

**同志社大学心理学部教授

***関西学院大学社会学部教授

やすいこと（態度対象に対して感情経験を伴いやすいため）、感情を誘発する映画を好むこと、感情を伴う出来事（ダイアナ妃の死）に対する反応が多いことを明らかにし、NAQ の予測的妥当性も示した。その後 NAQ に関しては、回答者の負担を軽減し利便性を高めるために、感情接近欲求 5 項目、感情回避欲求 5 項目、計 10 項目から成る短縮版 NAQ も開発された（Appel, Gnabbs, & Maio, 2012）。

NAQ の開発後、この尺度を使って多くの領域で興味深い研究が進められている（例えば、政治的態度（Leone & Chirimbolo, 2008）や職務満足（Schlett & Ziegler, 2014）など）。その一つである説得研究の領域では、従来はメッセージが説得効果をもつか否かはその合理性（例えば、論拠の強さ）や論理性（例えば、一面提示か両面提示か）など認知的要素に焦点が当てられることが多かったが、感情欲求との関連でメッセージがもつ感情価（どの程度感情を誘発するのか）といった感情的要素にも焦点が向けられ、その説得効果が検討されるようになってきている（例えば、Conner, Rhodes, Morris, McEachan, & Lawton, 2011；Haddock, Maio, Arnold, & Huskinson, 2008）。これらの研究の潮流からすれば、感情欲求は、今後、感情がかかわるもっと多くの研究領域で、様々な現象を説明する要因や調整変数として研究の発展に貢献することが期待される。

そこで、本研究ではこうした NAQ の日本語版を開発することを目的とする。オリジナル版の NAQ（Maio & Esses, 2001）26 項目に基づきこれを邦訳し、尺度の信頼性および妥当性について検討を行う。

方法

調査 1

参加者 ある私立大学の 2 つの心理学系授業の受講者 235 名（男性 100 名・女性 135 名）が本調査に匿名で参加した（ $M = 20.35$ 歳、 $SD = 1.05$ 歳）。調査の実施時期は 2013 年 7 月および 10 月であった。またこのうち 84 名は、再テスト法による尺度の信頼性検討のために、1 回目の調査実施 1 週間後に同一内容の調査に参加した。

調査内容 Maio & Esses（2001）が開発した NAQ 26 項目を、第一著者が原著者から許諾を得たうえで邦訳を行い、日本語版 NAQ を開発するための元尺度とした（Table 1 参照）。この際、バックトランスレーションによって原文を内容的に変えていないことを確認した。なお海外ドラマの登場人物名が具体的に示されている項目が 1 項目あったが、参加者の全員がその人物を知っているとは限らないこと、またその人物名がなくても項目内容は保持されるとの判断から、訳出にあたってその人物名は除外した。回答は 7 段階評定（7：とてもそう思う－1：まったくそう思わない）で行った。

調査手続き 調査は授業時間の一部を利用して集団調査法により実施した。参加者はいずれも調査内容についての説明文を読み参加に同意した者で、これにより調査参加点として当該の授業において加点を受けた。なお調査用紙と同意書を別々に回収することで参加者の匿名性を確保した。また 2 回の調査に参加した者の特定は、匿名のまま両調査において誕生日と携帯電話番号下 3 桁の数字を記入してもらい、それらを照合することで行った。

調査 2

参加者 大学生だけでなくより一般的な成人のデータを得るために web 調査を利用して参加者を得た。web 調査会社への登録者のうち 330 名（男性 165 名・女性 165 名、20 代 27 名・30 代 73 名・40 代 107 名・50 代 123 名）が本調査に匿名で参加した（ $M = 44.60$ 歳、 $SD = 9.33$ 歳）。調査の実施時期は 2014 年 4 月であった。

調査内容 1) 日本語版 NAQ 元尺度 調査 1 で使用したものと同一の 26 項目を使用した。

2) 情動強度尺度（EIS）日本語版 野口・佐藤・吉川（2008）が Bachorowski & Braaten（1994）に基づいて開発したものを使用した。この尺度は快情動経験に関する 14 項目、不快情動経験に関する 16 項目、計 30 項目で構成されており、5 段階評定で回答を行うが選択肢は項目によって異なっている。

3) アレキシサイミア質問紙 Toronto Alexithymia Scale（TAS；Taylor, et al., 1985）や Schalling-Sifneos Personality Scale（SSPS；Apfel & Sif-

neos, 1979) などの尺度に基づいて後藤・小玉・佐々木 (1999) が開発した Gotow Alexithymia Questionnaire (Galex) を使用した。この尺度は 16 項目から構成され 2 因子モデルと 4 因子モデルが提唱されているが、本研究では 2 因子モデルを採用した。2 因子モデルは、「体感・感情の認識表現不全」および「空想・内省の不全」と解釈される因子で成り立っており、各 8 項目で構成される。回答は 7 段階評定 (7: まったくあてはまる -1: まったくあてはまらない) で行った。

4) 認知的構造欲求尺度 Neuberg & Newsom (1993) によって作成された同尺度を廣岡・小川・元吉 (2000) が日本語に訳した 12 項目を使用した。回答は 6 段階評定 (6: 非常によくあてはまる -1: まったくあてはまらない) で行った。

調査手続き web 調査会社に予定する参加者の数 300 名 (男性 150 名・女性 150 名) と対象となる年代 (20 代から 50 代) を指定したうえで web 上での調査を依頼した。参加者は調査会社からの調査案内に基づいて任意に調査に参加し、本調査に回答することで商品等との交換が可能となるポイントの付与を受けた。

調査 3

参加者 web 調査会社の登録者へのうち 334 名 (男性 169 名・女性 165 名、20 代 24 名・30 代 60 名・40 代 123 名・50 代 127 名) が本調査に匿名で参加した ($M = 45.41$ 歳、 $SD = 9.15$ 歳)。調査の実施時期は 2014 年 4 月であった。

調査内容 1) 日本語版 NAQ 元尺度 調査 1 で使用したものと同一の 26 項目を使用した。

2) 日本語版 PANAS Watson, Clark, & Tellegen (1988) に基づいて開発された PANAS に基づいて佐藤・安田 (2001) が日本語版として作成したものをを使用した。この尺度はポジティブ情動 (PA) に関する 10 項目、ネガティブ情動 (NA) に関する 10 項目、計 20 項目で構成されており、回答は 6 段階評定 (6: 非常によくあてはまる -1: まったくあてはまらない) で行った。

3) 日本語版認知欲求尺度 (NCS) 神山・藤原 (1991) が Cacioppo & Petty (1982) が作成した NCS に基づいて開発した日本語版 NCS、15 項目を使用した。回答は 7 段階評定 (7: 非常によく

あてはまる -1: まったくあてはまらない) で行った。

4) 日本語版 BIS/BAS 尺度 上出・大坊 (2005) が Carver & White (1994) が作成した BIS/BAS 尺度に基づいて開発した日本語版 BIS/BAS 尺度を使用した。この尺度は「行動制御システム」に関する 7 項目、「行動活性化システム／報酬反応」に関する 7 項目、「行動活性化システム／欲求動因」に関する 3 項目、「行動活性化システム／新規性追求」に関する 3 項目、計 20 項目で構成されている。回答は 4 段階評定 (4: とてもよくあてはまる -1: まったくあてはまらない) で行った。

調査手続き 大学生だけでなくより一般的な成人のデータを得るために web 調査を利用して参加者を得た。web 調査会社に予定する参加者数 300 名 (男性 150 名・女性 150 名) と対象となる年代 (20 代から 50 代) を指定したうえで web 上での調査を依頼した。参加者は調査会社からの調査案内に基づいて任意に調査に参加し、本調査に回答することで商品等との交換が可能となるポイントの付与を受けた。

結果

因子構造からの検討 調査 1、調査 2、調査 3 で得た日本語版 NAQ 元尺度に対する回答のうち欠損値がないものを有効回答として (調査 1: 219 名、調査 2: 330 名、調査 3: 334 名、計 883 名)、以下の分析を行った。まず Maio & Esses (2001) の研究で得られた感情接近欲求と感情回避欲求の 2 因子構造を成すかを確認するために、オリジナル尺度の項目分類 (Table 1 参照) に従い Amos 22 を用いて確認的因子分析を行った。その結果、十分といえる適合度が得られなかった ($GFI = .80$, $AGFI = .76$, $CFI = .75$, $RMSEA = .09$)。

そこで、適切な因子構造を見出すために SPSS 22 を用いて探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行ったところ、解釈可能な 4 因子を得た (Table 1 参照)。Table 1 に示されたように、各因子に .40 以上の高負荷を示した項目に着目すると、1 項目除いて (項目番号 23: オリジナル尺度では感情回避欲求に属していたが第 1 因子に高

Table 1 探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果

項目 番号		第1 因子	第2 因子	第3 因子	第4 因子
6.	自分の感情を探ることは重要なことだと思う (S)	.79	.13	-.14	-.03
18.	自分の感情に触れることは、私にとっては大切なことである (S)	.76	-.21	.13	.09
17.	人は感情を経験するからこそ、生きながらえることができる	.73	-.17	-.02	.18
24.	私は、時々はいいい涙を流す必要があると思っている	.68	-.03	-.05	.13
19.	他の人がどのように感じているのかを知ることが、私にとって大切なことである (S)	.68	-.11	-.03	.20
4.	感情は人々が生活をうまく送るうえで役立つ (S)	.67	.00	.00	-.11
5.	私はとても感情的な人物である	.56	.30	.09	-.24
23.	感情的になり過ぎていると、どのように振る舞うべきか不安に思うときがある	.49	.29	-.19	.38
3.	自分自身、定期的に強い感情を経験する必要があると思っている (S)	.46	.33	.31	-.21
1.	自分の過去を振り返れば、私は感情を感じることを恐れる傾向にあると思う (S)	.04	.78	-.05	-.13
2.	身近な人であっても、自分がその人を好きかどうかを見分けるのが苦手である	.04	.74	.00	-.28
10.	私は自分の感情をどう扱ったらいいのかわからないので、感情を避ける傾向がある (S)	-.12	.73	.07	.16
12.	感情に従うといつも間違ってしまう	.03	.66	.02	.02
11.	感情は危険なので、私は感情を避けることができる状況に身をおく傾向がある (S)	-.17	.64	.13	.26
8.	私は強い感情が起こるとそれに圧倒されるのがわかるので、強い感情を避けようとする(S)	.17	.60	-.11	.20
9.	私は強い感情であれ弱い感情であれ、感情を経験しないことの方を好む (S)	-.34	.50	-.01	.34
14.	感情を出すことは気恥ずかしい	-.01	.45	-.05	.18
13.	自分の感情には没頭すべきである	-.13	-.05	.75	.15
7.	私には、強い感情が起こると予測される状況を好む傾向がある	.13	.06	.70	-.10
15.	強い感情は一般的に有益である	.00	-.11	.64	.13
26.	私は自分の部屋を、感情面に影響を及ぼす絵やポスターで飾るのが好きだ	-.10	.15	.58	-.11
20.	私は自分の感情をあれこれと考えるのが好きだ	.37	-.18	.53	.14
16.	人は強い感情を感じていないときに、最も効果的に物事を進めることができる	.09	-.02	.03	.66
22.	感情的な出来事を避けることは、よい睡眠を得るにはいいことである	.18	-.01	-.02	.64
25.	私は論理的で感情をはさまない人が好きである	-.22	.14	.19	.52
16.	人は強い感情を感じていないときに、最も効果的に物事を進めることができる	.15	.34	.00	.44

注) 項目番号に網掛されている項目が日本語版 NAQ の最終項目
項目の最後に (S) が付されたものが短縮版 NAQ の項目

負荷を示した) 第1と第3因子はオリジナル尺度の感情接近欲求項目から、一方、第2と第4因子は感情回避欲求項目から構成されていた。ところで NAQ については、感情接近欲求5項目、感情回避欲求5項目、計10項目から成る短縮版も開発されている (Appel, et al., 2012)。この短縮版の感情接近欲求項目はすべて第1因子、感情回避欲求項目はすべて第2因子に含まれていることから、探索的因子分析で得られた第1因子と第2因子がそれぞれ感情接近欲求と感情回避欲求の概念をより反映していると考えた。

そこで改めて以下の方法で、感情接近欲求と感情回避欲求から成る2因子モデルの確認的因子分析を実施した。つまり、上述の探索的因子分析で得られた第1因子に .40 以上の高負荷を示す項目のうち項目番号23を除く8項目を、第2因子に .40 以上の高負荷を示す8項目を各因子の観測変数として確認的因子分析を実施した。その結果、

オリジナル尺度の項目分類に従い実施したときよりも適合度は改善したが (GFI = .92, AGFI = .89, CFI = .90, RMSEA = .07)、まだ十分と言いつける適合度には達しなかった。そこでさらに、NAQ の短縮版 (Appel, et al., 2012) では5項目ずつで各下位尺度が構成されていることから、第1因子、第2因子ともに .40 以上の高負荷を示す項目のうち高い方から上位5項目を各因子の観測変数として確認的因子分析を実施した。その結果、さらに適合度の改善がみられ (GFI = .97, AGFI = .95, CFI = .97, RMSEA = .06)、今度は十分といえる適合度に達した。なお、得られた潜在因子の間の相関係数は $r = -.14$ と弱いながら負の相関関係がみられた。この負の相関関係は先行研究 (Appel, et al., 2012; Maio & Esses, 2001) と一致するが、先行研究で得られた値 ($r = -.34 \sim -.46$) と比較するとかなり小さい。調査1が大学生だけを対象とした集合調査 (以下、大学生サンプルと呼

ぶ)、調査2と調査3が60歳までの一般成人を対象としたweb調査(以下、一般成人サンプルと呼ぶ)であり対象者層とデータ収集の方法が異なっていたことから、念のためにサンプル別に同様の確認的因子分析を行ったが、大学生サンプルでも($GFI = .94$, $AGFI = .91$, $CFI = .93$, $RMSEA = .07$)でも、一般成人サンプルでも($GFI = .96$, $AGFI = .94$, $CFI = .96$, $RMSEA = .06$)ほぼ十分といえる適合度が得られた。そこで日本語版NAQとしては、感情接近欲求項目として5項目(項目番号: 6, 17, 18, 19, 24)、感情回避欲求項目として5項目(項目番号: 1, 2, 10, 11, 12)、合計10項目を採用し、以下ではこの尺度に関する信頼性および妥当性の検討を行った。

日本語版NAQの信頼性の検討 感情接近欲求に関する5項目、感情回避欲求(以下感情回避欲求と記す)に関する5項目、そして弱いながらも両者には負の相関関係がみられたことから全10項目(感情回避欲求項目の得点は逆転させた)について、各尺度の一次元性に関する信頼性をクロンバックの α 係数を算出し検討した。その結果、感情接近欲求で $\alpha = .83$ 、感情回避欲求で $\alpha = .80$ 、そして感情欲求全体で $\alpha = .75$ と、それぞれ尺度の一次元性を示すのにほぼ十分な値が示された。次に再検査法による各尺度の信頼性の分析を行った。分析の対象となったのは調査1で2回の調査に参加した者のうち、両調査の回答において欠損値がなく、かつ2回の調査で個人の照合ができた67名(男性22名・女性45名)であった。分析の結果、2回の調査間において、感情接近欲求得点(感情接近欲求に関する5項目の合計得点)では $r = .84$ ($p < .001$)、感情回避欲求得点(感情回避欲求に関する5項目の合計得点)では $r = .78$ ($p < .001$)、そして感情欲求全体得点(全10項目の合計得点。ただし感情回避欲求項目の値は逆転させたうえで加算した)では $r = .79$ ($p < .001$)とそれぞれ有意に高い正の相関関係が示された。つまり、参加者の各尺度に対する回答が時間を超えて安定していることが確認された。

日本語版NAQの構成概念妥当性の検討 日本語版NAQ10項目は、オリジナル版のNAQ26項目(Maio & Esses, 2001)の一部の項目であること、また短縮版NAQ10項目(Appel, et al.,

Table 2 日本語版、オリジナル版、短縮版NAQ間の相関係数

	オリジナル版 NAQ	短縮版 NAQ
日本語版 NAQ		
全体	.83**	.90**
感情接近欲求	.83**	.89**
感情回避欲求	.89**	.90**

** $p < .01$

2012)と一部は同じ項目を含むが(10項目中6項目)残りは異なる項目で構成されていることから(Table 1を参照)、まずこれら先行研究での分類に基づくNAQと日本語版NAQとの間で測定している概念に差異が生じていないかの検討を行った。それぞれの尺度間の相関係数を算出した結果がTable 2に示されている。Table 2に示されているように、日本語版NAQは感情接近欲求、感情回避欲求、感情欲求全体のいずれの尺度においてもオリジナル版および短縮版と相互の尺度間で有意に高い正の相関関係が得られたことから、日本語版、オリジナル版、短縮版のどの分類であっても測定している概念には大きな違いは生じておらず、日本語版の項目分類の構成概念妥当性が示された。

日本語版NAQの基準関連妥当性の検討 日本語版NAQと他尺度との関連から基準関連妥当性の検討を行った。Table 3には、各尺度の基本統計量(平均値と標準偏差)と日本語版NAQの感情欲求に関する全体得点、接近得点、回避得点との間の相関係数が示されている。まず全体得点についてであるが、感情に関する個人差との関係では、情動強度の全体得点と快得点との間に有意な正の相関関係が認められた。一方で、現在の状況における感情状態を測定するPANASのうちネガティブ感情状態を示すNA得点、およびアレキシサイミアの2側面との間に有意な負の相関関係が認められた。先行研究(Maio & Esses, 2001)ではPANASのポジティブ感情状態を示すPA得点との間に正の相関関係も示されたが、これを除くと先行研究と同様の予測された結果が得られた。また感情欲求の全体得点と認知スタイルに関する個人差との関係では、先行研究と同様に認知欲求との間に有意な正の相関関係が認められた

Table 3 日本語版 NAQ と他尺度との相関と他尺度の基本統計量

	<i>r</i>			<i>M</i>	<i>SD</i>
	全体得点	感情接近欲求	感情回避欲求		
<u>感情に関する個人差</u>					
情動強度					
全体得点	.20**	.29**	.00	94.2	12.0
快得点	.39**	.34**	-.21**	44.2	5.8
不快得点	.03	.20**	.15**	49.9	7.7
PANAS					
PA 得点	.02	.16**	.12*	21.8	7.9
NA 得点	-.29**	.03	.42**	21.2	8.7
アレキシサイミア					
体感・感情の認識表現不全	-.30**	.10	.50**	31.4	7.5
空想・内省の不全	-.33**	-.41**	.06	27.4	6.4
<u>認知スタイルに関する個人差</u>					
認知欲求	.42**	.39**	-.20**	64.8	11.9
認知的構造欲求	-.02	.06	.09	42.8	6.5
<u>行動の活性と抑制に関する個人差</u>					
BIS/BAS					
行動抑制システム	-.17**	.14*	.36**	19.1	3.5
行動活性化システム／報酬反応	.28**	.39**	-.02	16.4	3.1
行動活性化システム／欲求動因	.05	.18**	.10	6.9	1.8
行動活性化システム／新規性追求	.26**	.32**	-.05	7.6	1.7

** $p < .01$ * $p < .05$

注) 認知的構造欲求の得点化にあたっては、廣岡他 (2000) に準じて不適とされる 1 項目を除外した。

が、認知的構造欲求との間には関係性は見いだされなかった。さらに行動の活性と抑制に関する個人差との関係では、行動抑制化システムとの間に弱いながらも有意な負の相関関係が、逆に行動活性化システムのうち報酬反応と新規性追求の間には有意な正の相関関係が認められた。先行研究では行動活性化システムの欲求動因との間でも正の相関関係が認められていたが、この点を除いて先行研究と同様の予測された結果が得られた。このように日本語版 NAQ の全体得点と他尺度との関係では、先行研究 (Maio & Esses, 2001) とほぼ同様の予測された結果が得られたことから、日本語版 NAQ の全体尺度の併存的妥当性が示された。

次に感情接近欲求得点と感情回避欲求得点についての結果を述べる。感情に関する個人差との関係では、先行研究と同様に、情動強度の全体得点と接近得点の間には正の有意な相関関係が認められたが、回避得点との間には関係性が認められなかった。また接近得点は情動強度の快得点と不快得点の両方と有意な正の相関関係が認められたのに対して、回避得点では快得点に対しては有意な負の相関関係が、不快得点に対しては有意な正の

相関関係が認められた。このように情動強度との関係性からも、感情接近欲求と感情回避欲求が一次元上の対極に位置するものでないことが明らかになった。PANAS との関係では、接近得点は PANAS の PA 得点と弱いながらも有意な正の相関関係を示したのに対して、回避得点は PANAS の NA 得点の有意な正の相関関係を示すとともに PA 得点とも弱いながらも有意な正の相関関係を示した。先行研究では回避得点が PANAS の PA 得点とは負の関係性を示しており、この点では先行研究と異なる結果となったが、その他の関係性については先行研究の結果と一致している。アレキシサイミアとの関係においても、先行研究とほぼ同様に、接近得点が「空想・内省の不全」と有意な負の相関関係を示すのに対して、回避得点は「体感・感情の認識表現不足」と有意な正の相関関係を示された。このアレキシサイミアとの関係性からも、感情接近欲求と感情回避欲求がそれぞれ独立した概念であることが窺える。

認知スタイルの個人差との関係性では、接近得点が認知欲求と正の、回避得点が認知欲求と負のそれぞれ有意な相関関係があることが明らかにな

った。先行研究では回避得点と認知欲求の間に有意ではないが負の関係性が示されており、認知欲求との関係性でも先行研究とほぼ同様の結果が得られた。一方、認知的構造欲求は感情接近欲求、感情回避欲求いずれとの間にも有意な関係性は見いだされなかった。最後に、行動の活性と抑制に関する個人差との関係では、接近得点は行動抑制システム、また3つの行動活性化システムの側面のいずれとも有意な正の相関関係が認められ、先行研究と一致する結果を得た。一方、回避得点は行動抑制システムと有意な正の相関関係が認められたが、先行研究で認められた行動活性化システムの新規性追求との間の負の関係性は認められなかった。このように日本版 NAQ の感情接近欲求及び感情回避欲求と他尺度との関係でも、先行研究 (Maio & Esses, 2001) とほぼ同様の予測された結果が得られたことから、日本版 NAQ における感情接近欲求と感情回避欲求の併存的妥当性が示された。

考察

本研究の目的は、日本語版 NAQ を開発することであった。オリジナル版の NAQ (Maio & Esses, 2001) 26 項目に基づきこれを邦訳し、因子構造の検討を行った結果、最終的に感情接近欲求項目として5項目、感情回避欲求項目として5項目、合計10項目から成る尺度を日本語版 NAQ とすることにした。日本語版 NAQ に基づき、感情欲求に関する全体得点、接近得点、回避得点を算出し、再検査法によって信頼性を検討したところ、感情欲求全体、感情接近欲求、感情回避欲求いずれも時間を超えて安定した回答が得られていることが確認された。次に日本語版 NAQ はオリジナル版の NAQ (Maio & Esses, 2001) の一部の項目であること、また短縮版 NAQ (Appel, et al., 2012) と一部異なる項目で構成されていることから、NAQ 日本語版、オリジナル版、短縮版の間で感情欲求の全体得点、接近得点、回避得点、それぞれの得点間の相関係数を算出した。その結果、いずれの得点間においても有意に高い正の相関関係が得られたことから、どの版であっても測定している概念には大きな違いはなく、日本語版

の項目分類の構成概念妥当性が示された。さらに日本語版 NAQ の基準関連妥当性の検討を他尺度との関連から検討した。その結果、結果にも記したように、日本版 NAQ と他尺度との関係において、先行研究 (Maio & Esses, 2001) とほぼ同様の予測された結果が得られたことから、日本版 NAQ の併存的妥当性も示された。これらの結果から、本研究において作成した日本語版 NAQ の信頼性ならびに妥当性が確認された。

ただし日本語版 NAQ とオリジナル版、短縮版との間で1点だけ違いがみられた。それはオリジナル版、短縮版では感情接近欲求と感情回避欲求との相関が $r = -.34 \sim -.46$ であったのに対して、日本語版では $r = -.14$ とかなり値が小さかった点である。つまりこの結果は、日本語版では感情接近欲求と感情回避欲求は独立的にとらえるべきであり、両者を合成した感情欲求の全体得点があり意味をなさないことを物語っている。実際に、情動強度との関係性において、感情接近欲求に関しては高い方が低いよりも快・不快にかかわらず強い感情経験をするが、感情回避欲求に関しては快経験か不快経験かによって感情経験の強さが異なる、つまり感情回避欲求が高いと不快経験は強く感じるが快経験には強い感情が喚起されないことが示された。この他にも、感情接近欲求と感情回避欲求が必ずしも次元上の対極になっていないことは情動強度以外の尺度との関係においても示されている。

他尺度との関連を検討した本研究の結果から、感情接近欲求の方は、これから関わろうとする状況や活動によって誘発される感情がポジティブかネガティブかにはあまり影響されずそうした状況や活動に接近しようとする動機をとらえているように思われる。そうした積極的な態度が、高い認知欲求や、行動活性システムの働きの高さにも反映されたと考えられる。一方、感情回避欲求は、特にネガティブな感情を誘発する状況や活動を回避しようとする動機をとらえているように思われる。こうした傾向にある人は、普段からネガティブな感情状態を抱えており、「体感・感情の認識表現不全」に陥っている傾向がうかがえるので精神的健康状態もよくないと推察される。また認知欲求が低く認知活動も低調で、行動抑制システム

の働きが高く行動面での関連さのなさがうかがえる。

上記したような感情接近欲求および感情回避欲求の特徴については推察を多く含んでいることから、今後はこうした特徴が本当にみられるのかをさらに他の特徴を測定する尺度との間で、また今回の研究では行われなかった日本語版 NAQ の予測的妥当性の中で明らかにしていく必要がある。さらに感情接近欲求に限っても、上記ではポジティブかネガティブかにかかわらず感情を誘発する状況や活動に接近しようとする動機としてとらえているが、例えばネガティブ感情といっても怒りと悲しみではその感情が誘発する影響は大きく異なる。そうになると、どのような感情に対する接近動機なのかについてはもう少し詳細に検討していく必要はあるといえよう。

このようにまだ解明していくべき点は残されているが、問題部分でも取り上げたように、NAQ の開発後、この尺度を使って多くの領域で興味深い研究が進められてきている。この研究の潮流からすれば、感情欲求は、今後、感情がかかわるもっと多くの研究領域で、活用されその分野の研究の発展に貢献する可能性があるといえよう。

引用文献

- Apfel, R. J. & Sifneos, P. E. (1979). Alexithymia : concept and measurement. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **32**, 180–190.
- Appel, M., Gnambs, T., & Maio, G., (2012). A short measure of the need for affect. *Journal of Personality Assessment*, **94**, 418–426.
- Bachorowski, J. A., & Braaten, E. B. (1994). Emotional intensity : Measurement and theoretical implications. *Personality and Individual Differences*, **17**, 191–199.
- Byrne, D. (1964). *Repression-sensitization as a Dimension of Personality*. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research* (pp.170–220). New York, NY : Academic.
- Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment : The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319–333.
- Cacioppo, J. T. & Petty, R. E. (1982). The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 116–131.
- Cacioppo, J. T., Petty, R. E., & Kao, C. E. (1984). The efficient assessment of need for cognition. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 306–307.
- Conner, M., Rhodes, R. E., Morris, B., McEachan, R., & Lawton, R. (2011). Changing exercise through targeting affective or cognitive attitudes. *Psychology and Health*, **26**, 133–149.
- Costa, P. T. Jr. & McCrae, M. M. (1991). *NEO Five-Factor Inventory : Form S*. Odessa, FL : Psychological Assessment Resources.
- 後藤和史・小玉正博・佐々木雄二 (1999). アレキシサイミアは一次元的特性なのか—2 因子モデルアレキシサイミア質問紙の作成— 筑波大学心理学研究, **21**, 163–172.
- Haddock, G., Maio, G. R., Arnold, K. & Huskinson, T. (2008). Should persuasion be affective or cognitive? The moderating effects of need for affect and need for cognition. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 769–778.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2000). クリティカルシンキングに対する志向性の測定 に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学), **51**, 161–173.
- King, L. A. (1998). Ambivalence over emotional expression : Psychological and Physical correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 753–762.
- 上出寛子・大坊郁夫 (2005). 日本語版 BIS/BAS 尺度の作成 対人社会心理学研究, **5**, 49–58.
- 神山貴弥・藤原武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, **6**, 184–192.
- Larsen, R. J., & Diener, E. (1987). Affect intensity as an individual difference characteristic : A review. *Journal of Research in Personality*, **21**, 1–39.
- Leone, L., & Chirumbolo A. (2008). Conservatism as motivated avoidance of affect : Need for affect scales predict conservatism measures. *Journal of Research in Personality*, **42**, 755–762.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. (1993). The intelligence of emotional intelligence. *Intelligence*, **17**, 433–442.
- Maio, G. R., & Esses, V. M. (2001). The need for affect : Individual differences in the motivation to approach and avoid emotions. *Journal of Personality*, **69**, 583–614.
- Neuberg, S. L. & Newsom, J. T. (1993). Personal need for structure : Individual differences in the desire for simple structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 116–131.

chology, **65**, 113–131

野口素子・佐藤 弥・吉川佐記子 (2008). 情動強度尺度日本語版の作成 対人社会心理学研究, **8**, 103–110.

佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138–139.

Schlett, C. & Ziegler, R. (2014). Job emotions and job cognitions as determinants of job satisfaction : The moderating role of individual differences in need for affect. *Journal of Vocational Behavior*, **84**, 74–89.

Taylor, G. J., Ryan, D., & Bagby, R. M. (1985). Toward the development of a new self-report alexithymia scale.

Psychotherapy and Psychosomatics, **44**, 191–199.

Thompson, M. M., Naccarato, M. E., & Parker, K. E. (1989). *Assessing cognitive need : The development of the personal need for structure and personal fear of invalidity scales*. Paper presented at the annual meeting of the Canadian Psychological Association, Halifax, Nova Scotia

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect : The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **6**, 1063–1070.

Development of the Japanese Version of the Need for Affect Questionnaire

ABSTRACT

The present study developed and tested an individual difference measure of the Japanese version of the need for affect, which is the motivation to approach and avoid emotion-inducing situations. First we examined the structure of the Japanese version of Need for Affect Questionnaire (J-NAQ) and then demonstrated its test-retest reliability, construct validity, and criterion-related validity. The results showed the sufficient reliability and validity of the J-NAQ. Finally, remaining questions for future investigation were described.

Key Words: need for affect, individual difference, developing scales